
ちびまる子ちゃんH 「ヒデじいの墓参り」の巻
飛騨川鞍太夫

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちびまる子ちゃんH 「ヒデじいの墓参り」の巻

【作者名】

飛驒川鞍太夫

【あらすじ】

お金持ちの花輪家の執事、ヒデじいこと西城秀治は娘・春子と亡くなった妻・トシ子の墓参りにいっていた。

そんな時、ヒデじいは妻の墓の前で倒れてしまい……。

その1

「まる子」ことさくらももこは学校へ向かっていた。その時、誰かが後ろから呼んだ。

花輪クン「Hey、Good Morning、さくらクン」

まる子「花輪クン！？今日ヒデじいはどうしたの！？」

花輪クン「ヒデじいは娘の春子さんと亡くなった奥さんのお墓参りに行っているのさ」

まる子「そっか、ヒデじいの奥さん亡くなってるとったね」

花輪クン「ヒデじいは僕が生きる希望だと言っていたけど、家族は誰だって忘れられない大切な存在だからね」

まる子「そうだよね……。ヒデじいもいい家族持ったね。うちの家族は大切だと思えるのがおじいちゃんしかいないよ……。お姉ちゃんもお母さんも意地悪だし、お父さんはいつもビールとタバコと釣りと野球しか頭がないし、だらしないしさ……。おばあちゃんはまだあまあかな」

花輪クン「親になかなか会えない僕よりはマシだと思うけどね・

・・・」

逆にそんな賑やかな家族を羨ましがらる花輪クンであった。そのころヒデじいは、娘、春子の家に行っていた。

ヒデじい「久しぶりだな、春子」

春子「お父さんも元気でよかったわ。お父さんが世話をしている和彦君も元気にしている？」

ヒデじい「ああ、坊ちゃまなら元気でいるよ」

春子「そうなんだ、ウチの旦那も、中学生の娘と小学生の息子も元気でやっているわよ。お母さんも私たちを見てきっと元気だから喜んでるわよ」

ヒデじい「そうだな。それではそろそろ母さんのお墓へと向かうか」

春子「ええ」

ヒデじいは愛車のロールス・ロイスに娘を乗せてトシ子の墓へ向かった。

ヒデじいと春子はとし子の墓に佇んだ。ヒデじいは墓石に水をかけ、線香を焚き、二人は手を合わせた。

ヒデじいはあの時、つまりトシ子との日々を思い出していた。

花輪家でトシ子と出会い、恋に落ちたこと、貯蔵に高価な壺を割った犯人にされたこと、トシ子と結婚し、娘春子が生まれたこと、そして出征して、危機一髪にあったこと、そして、復員してトシ子、春子に再会できたこと、春子が嫁に行き、トシ子が肺炎で亡くなったこと……。

ヒデじい（トシ子……。そちらは元気になっているのかね？こちらの世界では私も春子も元気でやっている。お前が亡くなってもう10年か……）

と、その時、ヒデじいには何かが聞こえてきた。

ヒデじい「？」

これは本当に聞こえたのか。それとも空耳か。春子に問うた。

ヒデじい「春子、今何か聞こえなかったか？」

春子「何も聞こえてないわよ」

ヒデじい「そうか、やっぱり空耳だったのかな」

しかし、また何かが聞こえてきた。

？「……………あなた」

ヒデじい「……………？」

春子「お父さん？」

ヒデじい「いや、また何か聞こえてきて……。疲れ過ぎているのかな？」

そのとき、ヒデじいは急に頭がボーっとしてきた。

ヒデじい「う……。」

前が見えなくなった。そしてそこに倒れこんでしまった。

春子「え！？お父さん！？お父さん！！！」

春子は必死に父を起こそうとした。

そのころ、学校ではまる子も花輪クンもいつもと変わらぬ生活を送っていた。まる子はたまちゃんと登校中のことを話していた。

まる子「それでヒデじいがないから花輪クンは一人で登校していて一緒に歩いたんだ」

たまちゃん「へえ、それは偶然だったね」

と、その時みぎわ花子が鼻息を荒げて話に割り込んできた。

みぎわさん「ちょっとさくらさん!!花輪クンと一緒に登校したんですって!?!まさかあなたも花輪クンを狙っているの!?!」

まる子「ち、違うよ……。偶然だってば」

みぎわさん「言っとくけど花輪クンは私だけのものだからね!」

みぎわさんは怒ってその場を離れた。

まる子「そんなセリフ何度も聞いてるけどね……」

たまちゃん「……うん」

その2

学校が終わり、花輪クンは帰宅した。と、そのとき、お手伝いさんの一人が深刻そうな表情で花輪クンに近寄ってきた。

お手伝いさん「お坊ちゃま、大変です。ヒデじいさまがお倒れになりました！」

花輪クン「ええ！？ヒデじいがかい？！」

お手伝いさん「ええ。娘さんの春子様からご連絡がありました！」

花輪クン「どこの病院か言っていたかい！？」

お手伝いさん「はい」

お手伝いさんは病院の住所を教えた。

花輪クン「それでは行ってくるよ」

お手伝いさん「あ、坊ちゃまで一人では不安です。私もお供させていただきます」

花輪クン「S o r r y、ありがとう」

花輪クンはお手伝いさんとともにヒデじいが運ばれていった病院

に向かった。

その頃、ヒデじいが運ばれた病院では春子が不安な表情でヒデじいを見守っていた。

春子「お父さん……」

その時ヒデじいは自分でもわからない場所にいた。ここは夢の中なのか、それとも自分は天に召されたのか……。

？「あなた……」

後ろから誰かが呼んだ。ヒデじいは振り向いた。

ヒデじい「そ、その声は……、トシ子？」

トシ子「ええ、もう10年ぶりですね……、あなたも元気そうで……」

ヒデじい「ああ、確かにお前が死んだとき、私は失意の中にいた。だが、今は花輪家の執事として和彦坊ちゃまの世話役を貰って、私は生きる希望を取り戻した」

トシ子「そうでしたか、その和彦君もきっと私たちの娘の春子みたいに育ってくれているんでしょうね」

ヒデじい「ああ、お坊ちゃまは私のことを必要として思ってくれ

ている。外国での仕事でなかなか会えない坊ちゃまのご両親、つまり旦那様と奥様の代わりとして。それだけではない、お坊ちゃまのクラスメイトの方々も私を慕ってくれている。しかし、トシ子。私はお前のことを忘れたわけではないぞ。私はお前と出会えたから、今があるんだ。決して私だけのおかげではない」

トシ子「まあ、嬉しいわ・・・、でも私は亡くなってしまいました。もう少し生きていければ、和彦君にも会えたかもしれないのに・・・」

ヒデじい「でも、お前だって私の、そして花輪家の大事な一人だよ。でもこうして死んだお前とまた会えるなんてせめて生き返ってくれれば・・・」

トシ子「ははは、そんなこと無理ですよ・・・」

ヒデじい「そうだったな・・・でも私はまたお前と一緒にいたい気分だ」

トシ子「やめてください、私にまた会うために死ぬなんていうのは・・・、あなたには花輪家になくってはならない人なんですよ、和彦君のためにも、そして私たちの娘の春子のためにも」

ヒデじい「そうだな、私はまだ坊ちゃまの世話役としての役目がある。まだ死ぬわけにはいかないんだな・・・、しかし、トシ子、なぜ私の前に急に現れたのかね？」

トシ子「私が死んでからもあなたがずっと覚えていてくださったからお礼がしたくって」

ヒデじい「何を言っているんだ、死んでも家族は家族だ。忘れるわけがなからう」

トシ子「そうですね、では私はそろそろ失礼しなければ・・・、春子や花輪家の方々にもよろしく・・・」

ヒデじい「ああ、嬉しかったよ、お前とまた会えて・・・」

トシ子の姿が消えていった。そしてヒデじいの周りが真っ暗になり、ヒデじいは闇の中へ落ちて行った・・・。

やがてヒデじいの耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

ヒデじいは目を開けた。そこには春子と花輪クンがいた。

ヒデじい「は、春子・・・、お、お坊ちゃま、どうしてここに？
そしていったい私はどうしていたんだ？」

花輪クン「ヒデじいが倒れたって春子さんがうちに連絡が来たのさ。それで急いできたのさ」

ヒデじい「そうだったのですか」

春子「和彦君もお父さんが心配で来てくれたのよ」

ヒデじい「ああ、すみません、お坊ちゃま、私はもう年寄りですからね・・・」

花輪クン「でもヒデじいが無事でよかったですよ。春子さん、ヒデじいのこと本当にありがとうございます」

春子「いえいえ、和彦君にも迷惑かけて本当にごめんね」

ヒデじい「あ、そうだ、春子。私はお母さんに会ってきたんだ」

春子「お母さんに！？夢じゃないの？」

ヒデじい「ああ、夢だろうな。しかし、それでも私はまた会えて嬉しかったよ」

意識を失っている間に夢の中で死んだトシ子と再会したと聞いてどこか切なく感じる春子と花輪クンだった。

その3

ヒデじいの体調が回復し、花輪クンはヒデじいの車に送ってもら
う日々に戻った。そのことをまる子やたまちゃんに話していた。

まる子「ヒデじい元気になってよかったね！」

たまちゃん「でも意識なくなっている間に死んだ奥さんにあえる
なんて不思議だよね」

花輪クン「確かに、でもヒデじいにとってはいい墓参りだったと
言っているのさ」

まる子「そうだろうね、夢とはいえ奥さんに会えたからだね」

花輪クン「うん、そうだ、l a d yたち、ヒデじいので僕の
パパとママが気にかけて来週日本に帰って来るんだ。それでパーテ
ィーやる予定だから良かったら是非おいでよ、b a b y」

と、その時、ものすごい勢いでみぎわさんが飛んできた。

みぎわさん「花輪クン、私もそのパーティー行っていない？」

花輪クン「あ、ああ、いいとも、b a b y」

そして花輪クンの父と母が帰国する日……。

ヒデじい「旦那様、奥様、お帰りなさいませ。お坊っちゃんも元気でおります」

花輪父「よかった、でもヒデじいの方を心配していたよ」

花輪母「そうよ、倒れたって聞いたときはカズちゃんも気にしていたでしょう？」

ヒデじい「ええ、ご迷惑をおかけして申し訳ございません」

そして花輪クンも両親を出迎えた。

花輪クン「パパ、ママ、お帰り・・・」

花輪父「カズ、元気で何よりだよ」

花輪母「カズちゃん、寂しかったでしょう？」

花輪クン「うん、でも帰ってきて嬉しいよ」

ヒデじい「旦那様と奥様のお帰りを明日盛大にお祝いさせていただきます」

花輪父「ありがとう、ヒデじい」

花輪クン「パパ、ママ、僕の友達も誘っていいかい？」

花輪母「ええ、いいわよ」

花輪父「そうだ、ヒデじいも是非娘さんと娘さんの家族を誘っておいでよ」

ヒデじい「だ、旦那様・・・ありがとうございます」

ヒデじいは嬉しくて涙が出そうになった。

そのころさくら家では・・・。

まる子「で、今度花輪クンのお父さんとお母さんが帰ってくるからパーティーやるんだって、あたしも誘われたから行くことにするよ」

お母さん「でもヒデじいの心配をしに戻ってきたというのにそれでパーティーやるとはねえ」

友蔵「んん、ヒデじいは本当に花輪クンからも、その両親からもそれほど信頼されているとは・・・、ヒデじいは偉大な人物じゃー!!」

友蔵は非常に感動していた。彼はヒデじいを尊敬しているのだ。

友蔵「まる子！ぜひそのパーティーとやらにわしも連れて行ってくれんかの!?」

まる子「え、い、いいけど・・・」

友蔵はヒデじいに会いたい気持ちでいっぱいになっていた。

花輪家のパーティー当日、まる子は友蔵と共に花輪家に向かった。

まる子「こんなにいっぱい来てるねえ」

そのとき、はまじがまる子に声をかけた。

はまじ「おう、さくら、お前も花輪に誘われたのか？」

まる子「そうなんだよ、お、ブー太郎にたまちゃん！」

たまちゃん「あ、まるちゃん、こっちはもう大変だよ・・・」

まる子「大変って何が？」

たまちゃん「うちのお父さんだよ。花輪クンの家族写真を是非撮らせてくれてさあ・・・。ついでにパーティーを楽しむ私の写真まで撮るんだから落ち着かないよ・・・」

ブー太郎「さっきから花輪の家族写真どころか花輪の父ちゃんや母ちゃんの顔まで何枚も撮ってるブー・・・」

ブー太郎が指をさす方向に、たまちゃんの父が花輪クンとその両

親をしつこく撮っていた。

花輪父「あの・・・、穂波さん、もう写真は結構ですよ・・・」

穂波氏「まあ、まあ、折角の記念なんですから、ついでにもう1
0枚・・・」

父の迷惑な行動にたまちゃんがしびれを切らした。

たまちゃん「もうっ、お父さん！！花輪クンも花輪クンのお父さんとお母さんも困ってるでしょ！！！！」

なにも言えぬまる子たちだった。

その時、ヒデじいは春子とその夫、自身の孫との談笑を楽しんでいた。

春子「さあ、おじいちゃんよ」

孫たち「おじいちゃん、これからも元気でいてください！」

ヒデじい「ありがとう。嬉しいよ」

ヒデじいは幸せだった。花輪家の執事としての自分も、娘・春子の父および二人の孫の祖父としての自分も、大切な存在だと改めて知ったのだから・・・。

花輪母「ヒデじいは娘さんやその旦那さん、そのお孫さんにも会えて嬉しそうね」

花輪クン「うん、ヒデじいはウチで一番最高な人だよ・・・」

花輪クンにはヒデじいがいつもより偉大に見えたのだった。彼の妻・トシ子もきつと皆から尊敬されているヒデじいのこの姿を見ているに違いないだろう・・・。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~20049

ちびまる子ちゃんH 「ヒデじいの墓参り」の巻
2017年08月20日 23時19分発行